



河相一成 著

『恐るべき『輸入米』戦略——WTO協定から米と田んぼを守るために』

石黒 昌孝

この本は、日本の食と農を考える人にとって、いま大変有益な書籍だと考える。

それは、この3月からWTO農業協定の国際討議がジュネーブで始まろうとしている時であり、どう要求し、どう主張すべきなのか求められているからである。

本書は10章からなるもので、第1章のアメリカの食料戦略、第2～3章の米の輸入や安値の仕組み、第4～6章の米市場の現状と自由化の舞台裏、第7～8章世界と日本の食料と自給率の現状と解決策、第9～10章がWTO協定の改正試案という構成になっている。

いかに、日本人の胃の腑がアメリカの戦略によって変えられてきたのか、ミニマムアクセス方式、関税化、規制緩和にいたるまで、日本と世界の米と食料について、実に判り易く記述され、解決の方向を示している。

中心課題のWTO協定についての改正試案では、①例外なき関税化（農業協定4条）の廃止、②米のミニマムアクセスと関税化条項（付属書5のA）の廃止、③価格保障制度の廃止を強制し、農業主権と農業権を侵害する国内助成の削減条項（協定前文、第6条）の廃止、④価格支持予算の削減強制と例外なき自由化をゴリ押しする「改革過程の継続」条項（協定20条）

の削減⑤各国の食生活や食習慣を無視し収穫後農業を公認するなど安全について国際基準を押しつける衛生検疫協定の条項（第1～3条）の廃止を提案しており明快で判り易い内容となっている。

日本政府のWTO農業交渉への提案をみる限り、運動を反映して「農業の多面的機能、食料安全保障の追求」などあげているが、本書のように明確にWTO協定の改正を示している部分は全くみられない。

本書では日本の米輸入をめぐる①過大な減反を農民に押しつけながら大量の米を輸入する、②栄養不足・飢餓に苦しむ人々の米を奪い過剰在庫を積み増している、③日本1億3000万人の主食・米の将来の確保の保障はないとしている。

今回の提案では一応ミニマムアクセス米の削減を政府は提案しているが弱腰で、本書のように明確に廃止を打ち出さない限り、要求は実現しないのではないかと。また、ミニマムアクセスについて削減と同時入札方式の廃止を提案するなど、具体的で納得できる。

いま、農民は米、野菜、果物などの価格が暴落し苦しんでいる。原因は輸入激増であり、私たちはセーフガードの発動を求めたがっている。1168自治体で意見書をあげ、政府を調査開始まで押し上げることができたが「WTO協定を最大限活用して人権と食の権利を守りたい」と指摘し国民のたたかいを激励している点にも感動する。

多国籍企業のためのWTOとたたかい、国民の食と農を守るための共同を広げるためにも、おすすめしたい好著である。

（合同出版・2000年9月刊・1400円）

（いしぐろ まさたか・農民連事務局次長）